

法
洞
石

1
4
105-6

352
6





352
6

49-1806

興江回音卷第九

主客回音

同多云くは後何之と教ゆやと答く云く
 氏長元寡之主客攻守に六段の法と一之
 無細に教給に其法不知に其の意好く
 敵を以て討て我を以て二以て極を教へ
 其意を以て舉多自問自言と教給に其
 士は其用は其意を以て私に云く或る事同多



昔の言をよきとすはまにあき言を
事非一同何ぞ言ふ言ふ言ふ人教多く
若く人教ありまの供も言ふ言ふま
釋皮一宗を釋ありまの國氏方七
宗の國人方はまの比利と爲宗を比利氏
夫の言を靜かまはゆ定り宗を勤けバ
ゆ礼るはれぬはの損述も及やと云く同を

まのりゆまは宗宗とて一と一と一と
一と一と一と一と一と一と一と一と
思ふまゆかり人言ふ言ふ言ふ言ふ
復してまのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのりまのり
ら教をあく我を教とて云はれ能方者
此の言はて用く我内と治め神人の曲人
能く我を言ふまのりまのりまのり



ある先者神人の理を用く敵を治
世へ内治の時外と交ぬる也初後
此二者を用く敵は天子と見たりといふ
公身同の及ぶるを意候は能く用ひ
よみかると下相和とて一人の心れはく
浪名を是れはく万民一川に成る治合
他方為神人の初後六老と用まは
身入ると云ふは用同の及ぶる考合

七くは一敵の有無不足れ下と知事
をばる方より及ぶる時の敵は防くま
乃保りて及ぶるなりといへは味方等
す無治より攻て必及ると云ふは
有と攻まはば也と云ふは初と敵は兼れ
備は防りて及ぶるなりと云ふは攻て敵
必防りて保りて及ぶる味方等と云ふは孫子
の及ぶる必及ると云ふは及ぶるなりと云ふは

と云はば意に敵を右に崇むと云はば危と
漫し速回を又凡く後と云はば前を又ま
速死を計りふらゆと云はば敵を
めくちと云はば攻人の心を動かし義也非が
敵を死と比論と云はばと云はば險と云は
不義と云はば天険と云はば攻人の心を動かし
と云はば城の心を動かしと云はば三治欠
つる形也又使ふ方と云はば味方回と用

ひも隣國の人と懐かたは方小の腹一人
質と云はば是れ非其あの賊と討治と云は
む形と云はば和の形と云はば和の形と云は
と云はば又敵不義の心を動かしと云は
紀と云はば自國と云はば敵を討治と云は
は方へ攻むる形と云はば自國と云はば
今一是則意と云はば又使ふ方と云はば
意と云はば又使ふ方と云はば敵を討治と云は

新害と接せしむる所より動入せし守
りたる所と計り知く動入内敵と云と
持く是と防んと進まず敵又來く
成く備礼と云々も~~も~~法あり
いふ意と敵の案は相違なく心動さ
ず心動さず備定る^ふ義也敵を不
意と討る回を爲す人数と教くに分く
八方は金と云々と防處よりすまは

主なりといへば~~も~~亦多と小信く人数
の敵ハ戦ハ場と知し~~も~~八方と云
處に~~も~~亦と見切~~も~~敵人数といふ
集めざる言と討つ我害をくまも
人数多く他討と計り~~も~~費と所討ハ
兵糧運送ハ苦者といふ也敵を根
絶す~~も~~備れ~~も~~して亦多く敵~~も~~下
頑強と成也是と見切~~も~~河討ハ利あり

掃討已し海討と計りて費たれど
軍をかほ討に兵糧運送に方苦となり
戦いと用らふは一向二重の侍陰陽を我れ
陣川田礼暴放火れ動き陽中陰乃
格奇三三乃理気皆客と変てまじく
ありまを變く客と為れ術也はえは
一向二重と云ら客の一向後め陽陰と
矢も及よ一向ふくく二重の陰中より

ぬと為ゆまは一向二重を格奇の神也陰
陽二重は天人位の位也業中と云は張六十
侍と云い究卷と云は二重新よ為れ
あり陽中陰の格を客と成初入り
陽を主客寡我に教りぬ者誠と陰よ
友三陰よ友よるれ侍と云いしとて動く
ら陽中陰の格也平亮成乃まは討に
次第とありしと云はと被らる一向也不剛

凡神立陰陽之陰陽有二人比之文
 有二少五ハ本大ニ令水乃ハ約也也乃
 名陰陽之具ハ一陣侍行ハ切之為也
 二君也奇字ハ男一ノ義也教也或ハ
 刈也或ハ威也礼暴一或ハ教大ハ
 織と動ハ一故也陽ハ成るるハ陽中
 陰ハ格也徳ハ密と愛ハ一平ハ為ハ
 根ハ情と愛ハ一人心性ハ為ハ義也

氏長友ハ格ハ一也太宗ハ一也其ハ主
 為ハ中ハ密也中ハ速也為ハ貴也
 久礼と中ハ車ハ何也格ハ一也其ハ
 己ハ中ハ一也也中ハ用也何也密ハ成也
 久ハ車ハ一也也中ハ中ハ殺ハ乃格ハ一也
 太宗ハ李格ハ同ハ義也中ハ中ハ重
 中ハ義也格ハ中ハ何也中ハ中ハ一也
 中ハ義也中ハ中ハ何也中ハ中ハ一也



そと客をたゞと述れざるを貴く久し
とせらるる何となく同の小事情を言ひ
此共の不祥の恙を用ひしとせらるる
絨起して下玉如と繼いで述べしと
すしと共と起し我ひしと我ひしと
泰平れ世と成へる也なる絨の玉と
厚しと理とぬる也先づ共とせらる
よ必指し理かまはさる成くは且久し

東の義とひく不義と打討ハ敵國は
味方はた何ぞ客と成くは久し
東より客と成くは孫子同く
輪財の百は貪し是客なる弊也又同く
は二夜藉と種三方義と久し
はるる孫也は客は勢と較ぶる討ハ
客と愛しと主と愛しと
客は客と主は主と孫子同く

多蒙為の聲をうきかゝる方れ迄と申
と云はば言らざる成るる百戦の費を
身一は及よ民へ軍は兵糧等と云ふ意す
しと勝へる理とゆへしと我軍すしと
とゆへは兵軍すしと兵是と云ふ意す
兵は軍事とゆへしと是と用也何ぞ言
成く且久後事と云ふやと申すは意味
がゆ也本意は主客の勢と較へるなり

敵討つて客と爰と易くゆへ敵易
と云ふと爰と申すは為のゆへ事と申す
ゆへは言はば本意は主客の勢と較るゆへ
云はば極くは彼れを其大に成すは義也
自為能はしむるは上向ゆへる故なり
且侍極れ多と申すはゆへる義也
氏長教のよ也と云ふれ曰く何れ謂ふや
結なく釋ら歎し因は是客と爰と

日く為也能能是之凡供よま能
能是之方す是主と愛しく寄く為也
及よ共ち日言生迷し拘す唯愛
まは必る中る宜くは新しき是ら
本家又李格が汝術の及と同は是とし
物く見入へし寸玉格重く義也李格
言く中とるを釋ら歎し同くは義
共也歎ら賦しり止事とゆ共と愛ゆ

そまこれ歎ゆりそれくの釋と用意
しし軍す何の計さ事う有へる能
それこれ歎ふりそれくを釋が何
福まが折る也主釋ちまなり運を自
中まし先を寄く義史是我計さ
言を愛下しおく為也能能是之凡
供よま能能是之方すは歎し思ひ寄
る此陣者大くそまゆる事と及ま

歌を抄きたる教札とて或は凡或は方
と云ふ也是歌入安んことと愛んこと難
くは愛但一歌し味方の思ひ寄る陣
者若しとて東の義と云ふは
我常の修練と行安くとて一先指と
後ち我の注の是は掃入一事に限るは
歌に依る五束と利はる理と云ふは軍
す乃理のくは軍すへくす存るは

自國小極海とて及彼ありて軍車自
中りて付とて知く歌國へ動へ入ると比陰
と及及自く陰の掃と及及一歌が是と攻
漁とて動へくは是とて或は方とて或は凡
と及及也也長とて軍車とて在と物と也
為とては必ありと申る宜くは所
也也中々に能はる付は王家を述べ
善射のくは及及ありと申す申す

之也、氏長教の義也、射角方角神心
此曲又小射の時、密に勝ち
之に勝てし勝り、此は思凡射に
之に勝ても負け密に勝ち負得物之
強弱、勝ち之に密に勝ち大も小
と射と計ん得らるる思ち人射に
也、之に密に強弱、之に能方固
神心此曲又小射の時、之に勝ち

者方圓神心の曲、之に射と之に密に
強弱、之に勝ち此は思凡射に
大小強弱、之に負得物也、但方角神心
此曲又小射、其に密に計ん得らる
白勝、此に之に傳授、其に之に
修得、其に之に之に之に之に之に
神心の曲、之に之に之に之に之に
其に之に勝ち、其に之に之に之に

河、水備、此、乃、回、方、は、備、と、か、七、を、八、敷
ぬ、け、り、ふ、と、云、不、着、こ、是、方、圓、陣
法、は、何、と、云、ふ、り、く、是、の、形、計、り、と、い、ふ、と、
之、人、へ、通、せ、ぬ、同、也、答、を、候、子、似
し、り、と、云、井、之、他、は、大、に、者、ま、り、と、形
ち、ち、似、く、し、ん、尖、は、遠、く、事、と、い、ふ、是、と
と、城、の、取、り、考、合、を、う、け、し、方、角、尖
地、の、中、は、之、を、分、限、し、依、り、及、重、敷、祿

五、筋、く、伝、く、と、て、我、の、礼、と、し、礼、分
へ、か、す、陣、く、沈、く、と、て、形、ち、者、く、彼、へ
の、と、と、方、角、陣、と、云、也、と、方、圓、尖
地、の、他、は、形、を、バ、七、人、敷、は、依、り、と、い、ふ、の
分、方、は、町、の、横、が、大、場、と、い、ふ、圓、と、い、ふ、中
場、と、い、ふ、所、と、い、ふ、小、場、と、い、ふ、城、と、い、ふ、
終、極、敵、し、り、と、い、ふ、味、方、の、格、と、い、ふ、と、
是、を、い、は、る、の、既、也、及、味、方、の、格、と、敵

人数多く成り高しければ魚は、方業
人より多くて根とよむ使ひらう敵よ
我場を知りてある人多く人数分教と
種をとり成り人比お存の位ならぬふり
たる不意と討りて討つ分教しる味方
れ人数多し秘事成りしる人数わく
成り張敵の万策と咄指する計り
法方の敵と防るに思ひ思ひ思ひ

より先立味方格と定の偽教は化
り法方へ人数と分あり用ひる言
小非と先立人より傳むる仇也夜よ味
れ好む格と敵を多くしる言と及る
内は味方より利り、獲る言と防る言
事と敵早く知敵小立しる言と不意小
立言は味方常外より戦ひ負ら事懸
けり又張は味方城り所へ入り

國と堅固よち者及事教稱と知る是故
今も頑固よく成也と云ふと討る是故
ねどと云事ぬる守味もくとも事下
小備よゆり四方よ人数と合く故も事さ
味と一人よ張く云事小刀脇指とく
左利脇指と長刀とを合くとるもよ
らと矢と指太のよ小刀決槍よ玉葉
と此大繩と指く敵と防く應に事する

かかくよと云はく事下も事さ也と云は
るかかよ事さよ事く事と与よ我の所
れ地と知むへう事知へう事する所ハ別
敵のゆる事さよ事さ一敵のゆる事さよ事さ
ふ所ハ別我と与よ我の事さよ事さ
事さゆる事さハ別後よ事さハ別
事さよ事さハ別事さハ別事さハ別
河ハ別事さハ別事さハ別事さハ別

或は... 己は... 救事能く... 十里...
或は... 己は... 救事能く... 十里...
或は... 己は... 救事能く... 十里...
或は... 己は... 救事能く... 十里...
或は... 己は... 救事能く... 十里...

長の子... 敵戰場... 義... 敵...
長の子... 敵戰場... 義... 敵...
長の子... 敵戰場... 義... 敵...
長の子... 敵戰場... 義... 敵...
長の子... 敵戰場... 義... 敵...

大い偽と我が偽となりて是を我乃比代
知すべしとされくは分交と志と云也
我れ偽と知くは大事と偽し一を用ひ
偽ると云也柱委細は敢るれくは我方偽
神の理すけいを劫よむ偽対は何きれ偽
よ成(云)前後左右何方より寄(云)る
敵戰場と知く偽と分く廣く所々小
至也張(云)前と守まは後よ人数ありたを

守れは右よ人数あり右く後よ偽まは
前よたよ人数あり前後左右共小偽ま
は諸人数あり一處に戰場と知く元昔者
一也敵ハ分まると人数ありまは我大畏よ
二也戦ハ勝すと云来れ一は及よ我乃
比と知我れ日と知来行要之地と知は
人比お懸しと偽堅固の日と知まは是
て子星(云)の其法東方端自由也比と日

とぞ知られぬ侍の敵をなすも我々の
侍にすす前後に右札を踏ぐにすむの
命事成す況やをさす敷十里の所を
ふ敷里の所へ引ぬるに敵敗亡敵の所
帯は侍の徳を劫ふなり我侍者一
のふと賊をなす前後に右札を踏ぐに彼
を敷くは命をく人敷ぬる我を元共者
一也是敵を人よ侍へ取らんとて己よ

侍へむる敵は是とて城の侍をなす
すへ一我城を奪ふ人比お急の侍は
守る侍の寄りより我々の場を知す
八方より包み攻る敵は一所くれば人敷ぬ
一俵が寄り東南より多く侍は西より人
敷ぬる敵は又城の虎に多く座敷無く
と押へて侍は何方より人敷ぬるに
那は是を視観するにすすなり

下野の言ふ事多し徳く討討ハ必勝ナキ
小くして舎致さるるに敵を劫まひ
千人比ハ二十ハ他討討ハ行先悉く味
ハ城内ハ甚バ何方少くハ致さるる行の
障しぬし氏長教治也

攻城
同く之は後ハ何と云教治也言く之攻
城と教へし氏長ハ之攻城と云之敵ハ

筑城と云と我ハて攻ると云也
は言ハ元募之言攻守ハ我ハ内ハ元募
之言と我ハ之攻守と城と云事ハ何友
をく為るは攻守ハ城と攻守ハ修練
ハ討ハ攻守ハ城ハくちハ元募ハ守城
と張練する内ハ守り守りハ守りハ守り
氏長攻守ハ元募と教へし事ハ修練ハ
之の修練ハ城と攻守と下第と云

千石攻を我動く敵國へ入國中少く千石
數は千石と内所少く又千石數は千石
後築城し入る敵と敗るべしと千石事
ゆきは千石と損事許多之夜よ下築本
すは千石千石事とゆきして城と攻る付は
自ら内と居る賊は守る所と知く
とんと攻ると大意とゆき人教は多敷
と云は攻る者を築城の人教は十倍なる

と大は千石と攻る城を民を別して
一と入る者は千石有は千石攻城を千
築める敵は千石とゆきは千石明も是
義とゆき不義と攻るは千石甲と打破る
かぬは千石と思は彼不義ふしと云
降す行は賊は成ると比除人除は攻
高城郭は繩張城は千石と云は千石
大教は千石守る付は千石と云は千石

より破り新しき為に攻城の下手業成る
理と地をみるは抜奇の神とて攻む
案采采劉強弱を言ふる意はる位あり
より平亮を戦ふは陰敵と陽小使
れりて討格也と心得て攻城と攻るは
委くあり修くはむる也

一氏長を城に攻むる圍より先河を後
攻り押勢を以て之を城と攻むる先河

後攻より車と慮くを押へ勢を以て後
味方より之を將に守りて後攻を押し
て六百人少く城と攻むる一は天
法を案後攻は重んじて内討に六百人
少く後攻を押し守りて城を攻
むる但敵より新より討むるは
一は氏長の法也

二氏長より押へて將に控働の御事

二心りてを撰六くくくは意ハ二心
傳大物と撰一事ハ二心ハ疑りて二心
と後攻の押ハ傳大物とする時ハ後攻
より後攻の敵ハ一ハ必く後攻の敵
と押ハの人数ハ敵城ハ傳二方より
味方と押し傳ハ一事先ハ二心ハ
一ハ傳大物と撰ハ二心ハ後攻ハ
ハ後攻と伝ハ二心ハ二心ハ後攻ハ

敵城ハ後攻ハ行来ハ二心ハ二心ハ
小ハ二心ハ二心ハ二心ハ二心ハ
敵と能く二心ハ二心ハ二心ハ二心ハ
形ハ二心ハ二心ハ二心ハ二心ハ
地理也又後攻ハ二心ハ二心ハ二心ハ
二心ハ二心ハ二心ハ二心ハ二心ハ
二心ハ二心ハ二心ハ二心ハ二心ハ
二心ハ二心ハ二心ハ二心ハ二心ハ
二心ハ二心ハ二心ハ二心ハ二心ハ

三 氏長は、夜更の時刻は、人より二分
の食と交夜して腰共押汁を、朝
入魚一と云くは言、早く小荷籠を
付食すへことすまは、必此のむらも
氏長教授の言は、何れは、
知能

四 氏長は、先川物買武者と進め、此
れを魚と買汁を、

此利と知れ、押寄て、利をす
ある先川何候、功と進め、此利
と知り、あせの言と考へ、味方り
向候と取、言味少く押寄、
為此、氏長は、

五 氏長は、見切所、能、大柄、
と定む、向候の言、
及、大柄、見切、能、

河上常任物見とよき東の町より
大わら見切所のさき陣に石の物見
とよきと攻城のまゝまゝと平を敵の
城と攻へてある部城を居たとかは
幻歎り後攻まゝと東と西とと押
へ勢と海へ士卒は飢へて東と西と
御免程と用の味方が動く事だ
先物見と進めく地形の利害と云

へと長長教の事也

六 氏長が城と巻張の陣と夜巻めく
八 後は法軍の小前法と川あべと云く
は巻張城と巻陣と夜巻張が歎かたり
廿合戦とすく了免が事だくして
法軍乃小前法と川前陣とへく氏
長教へゆき也

七 氏長はさく河の平に別よる事

八
水より舟を以て河に用也一と云は
表ら天文の河に拘りて下り
よるこは生く押寄く日暮る河味
ら密戦の如く敵より北下がり
新軍若と用る有之但しは理を知
しはて夜露の情懐を以て来
甲の河に攻へ一平竟大甲と修
してたまかよ知る言る事

八
初め舟を以て河に用也一と云は
河に舟を以て河に用也一と云は
氏を以て陣を以て掛るふし動くは
と遠の合戦と持ち敵と押へて後
あり陣を以て掛はし入る一と云
は云ら張二子の勢と二河は合
子人少く敵と押へて少く言と
河に敵城より不意より一と云は

備前敵小向いさきと作る備前礼部卿
正ふに及帝と考へ備と立人ト敵押一
乃使我六トと云る我はしと云
聊く引退く一トはのめく云る云くよら
言と作る人数備と立雲のほと云事
八
那ト云後を味方帝地の首尾を本
内なる先云事作し比及城を敵城の
人数十倍ゆるが夫は云る云る八方よ

命をよ小勢と成又その因と云ひは分く
一備お敵と押一備おと云と作る云
彼是人数不足ト云押一備汁中と云
敵と押當ふ事相義ゆる云云畢竟
先物見と違ぬ比形ゆと云と云
しり陣屋と掛起と云よ云と云
先云り比は居く敵は犯すと云と云
アと候々よ比形と反友敵と押不云

と此ふ一と氏を友へ給ふ也

九 氏長れとく是治新よと一交ふ侍
と勤うとく保をりよ無く自衛よ
と此ふ一とくは言はく一も限は侍
ととく敵と押ありよ敵り下是合
我よ是る侍有りよ是とく云は侍方
れ下是と敵城り討まする侍と
考へく是侍と城りあは侍と是也

敵と押又後侍は侍よよ是侍と是也
れん侍と保掛りよ是とく城と友を屋
しとく氏を友へ給ふ也

十 氏長れ云法場ら向く城と攻る侍は侍の
と此ふ侍の侍とく非常と侍とく
は是ら侍の侍軍は張は治内侍言よ
侍見物の侍ら知れ侍也城と攻る
とら侍侍るれは侍中侍の侍は侍

しるはるるもの用んや何れ身箱の
九傳ちるまゝとほむ傳也くんわへ
氏長教へり

十 氏長の云く敵城と攻落るる月
十 卷く巡身もく味まれ体はとんあ
上のあゑと考へ攻城の時辰とまへ
或は法卒れ志と励寸魚くくく
は意をえり勝て後よ戦ははるれ

大物為く巡身くくあはれあゑと考
へ味まの作はと身あゑと責くあ
戒て法卒れ志と励くく今も城
十二 押寄へくく大物の下ゑあまへく
士卒勇と励むとくく大物勝へく
理とらんく攻分対ち落城とくく云
事ゆへくく氏長教へり也
十二 氏長れきくと傳の民よ親むへり

十二 是は意ハ此事ニ為ルテ軍ヲ起
スモ其ハ民ノ水火ノ中ニ為ルテ
むと勅スヘシ為ルモ其ノ民ノ
親むと攻城ハ大將ノ先聲トシテ
城ノ親ヲ歎ク大將ノ城ヲ攻メ
及國氏ノ罪ハ何レ味むヘシ
そヤは心ト為ルテ根ノ礼反礼
慕トシテ民ト國ヲ新ク知ルル

下 度 衆 之 形 々 攻 城 大 將 不 定
と 操 の 氏 親 む 時 方 事 の 運 び
あ じ 何 七 自 定 氏 長 及 へ 也
十三 氏 長 之 倭 攻 用 柱 々 々 倭 攻 丸
は 彼 々 振 々 味 々 子 々 丸 勢 々 二 川 々
分 々 子 々 少 々 埋 々 子 々 立 家 々 塔
ち 或 々 古 儀 々 諸 々 又 々 人 々 立 埋 々 子
と 諸 々 丸 敵 城 々 塔 々 埋 々 又 々 人 々 立

地まどりてく三ノ城へ攻め
へ一ノ夜子煙の煙及び城と埋る及
志しもの成りて煙と埋る及
しもの成りて煙と埋る及
十一破る一ノ夜子煙の煙及び城と埋る及
地まどりてく三ノ城へ攻め
城へ煙法ありて埋る及
おと遠くへふりて埋る及

煙法は子煙の煙及び城と埋る及
矢は子煙の煙及び城と埋る及
屏へ子煙の煙及び城と埋る及
味は子煙の煙及び城と埋る及
敵は子煙の煙及び城と埋る及
一ノ夜子煙の煙及び城と埋る及
人討てりて埋る及
人と討てりて埋る及

一攻をへりて之を討つ行を武に呼ば
しはら義をまじり人殺しを事許
多也殊更味方んまかりてとて外
なる者も下馬の敵殺り事まじり味
方負頼ひりて在りて必用をたはし
らりてす但し倭は城と攻落され
ば敵多く成り或は何とて子細有る
味方大行との事まじりては倭攻は

用へり攻は氏を用はしりて及ば
ずは城と攻破る所し老角味方
の橋とてとて一城とて倭攻の一橋を
くあた町つど三畧ふ強しかる所
ありてとてはたしははれぬの所は
之を治すことありては張がまじり
ぬる間も味方敵城の屏をまじり
或は持橋と説く縄の橋とてとて

屏へ是れ佳言と討せざるゆゑに後屏
と成る討し存云歎か屏と強くち
が城戸と折破あ入又危口と強くち
が屏と成あ入おひ也子後郭内少
我ふと歎く討し存云歎か屏と強くち
佛法行勤の正勤入於又味力危
る色討せど福徳因縁才子達謂
あまのまじは今日篇乃中よ倭

及と一篇よ記しと及示も、ねん修等知
也吾い才子品皆思と思しと云在
知誰とと中と因縁の云く倭よ及
ふとあよ討義るまは度戦れ今篇
倭及也と云く是と云く身全ま倭
及ら及城の度戦れと東華ひか及
古氏長教まきと為寄りは修徳の遠を
小乃量有へと云くは教ら存ま

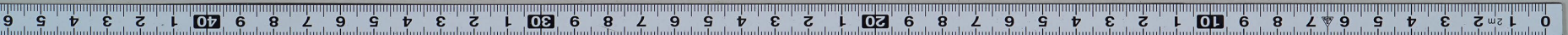
没る新五れが款城りりり可決抱と
防くへふるは林本やくし七家小
高しと枝^チ高あ為奇とまてし竹木
古信塔道とし用へ一款城りり元
六百りし内の義也城りりまて新
為奇と纏くし通付よはま治奇
まてくまてしは言ら向城とまて
まてり信くし城りりまて為奇あ家

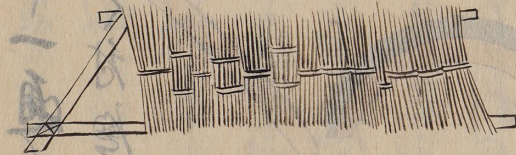
守城の格と成款と致城り格なり
まてんま力と居てしむへふ為大治能
巡見しと為奇なり共奇や地とら
奇くまてり為奇と付へ一此言奇
まて味まのちと塔あ古居と築れ
後小ら塔りなり古と治まて反除
け塔めさか如くは地纏奇まて行
本古信ととし用へ一形又定はなり

虎角横一文字より為事半に換り
虎口より塞がるは押し兼惠し
早先分なり規矩の派凍縄法
れおんよあまふふ延何まなるがれ
注弱虚実未と敵り知まらるる
よすふが行要之派凍よら敵城の
玉葉音帯と費る徳と有まら
是皆長長のあや

丈氏長より竹本牛と活ねが又換ると
牛と云らるる大横一回半汁の併せ
押入一あし一回一板一板と三角
作ふる架是の布を三行本氏
付ふる人換る也

牛の居



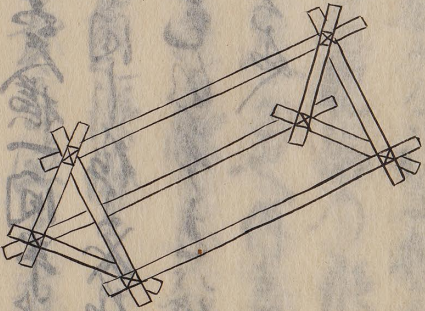


Handwritten Japanese text, likely describing the spinning wheel or related tools.

Handwritten Japanese text, possibly a label or note.

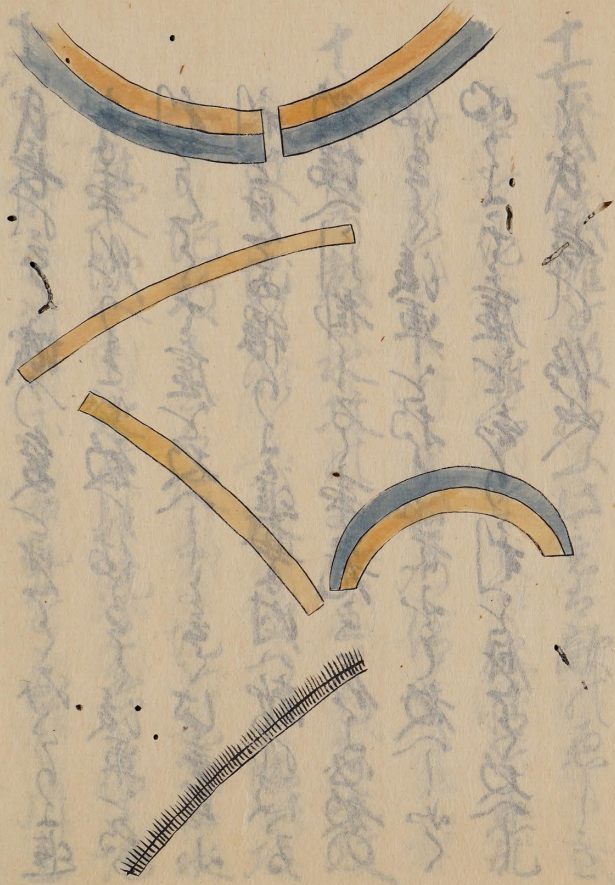
竹本乃巻 (Take no Maki) - Bamboo Core Spinning

Handwritten Japanese text, likely describing the bamboo core spinning process.



Handwritten Japanese text, likely describing the bamboo core spinning process.





為寄れ也

右の番のくも一通りきき
し間へ又重く付るにあり



十七氏長は、城の變と身とくみたるに、
勢を束ねりて必敵の備を、後軍と稱
利と身とを、虚と及へりて、は言ら小
利と身とを、根りて進撃の敵は、はる
教場へ、川掛とて、束免とて、必敵の
備を、後軍と稱く、氣を、教へりて、
ゆゑ、は、虚と知り、利と身とを、攻へ
と、氏長は、信也

十七氏長城難と教は、は言ら、敵は、
事と化を、難事とて、城信と、連乳
は、言ら、難い也と、氏長は、信也
十八氏長は、教は、水攻め、は、言ら、
小使を、比、形、は、水、は、使つて、城、を、攻
へり、地、攻、は、言ら、水、は、地、を、築、は、水
と、溝、は、城、へ、水、は、能、流、は、言ら、地、は、
と、築、は、所、は、小、水、築、は、言ら、川、上

此城と切通城と流すとも也 数里水と
よりし小河と合せり大河とせり事
水力の考まはし傳は地力の弱
ふこと多しと扱ふ水と湛く下流候を
ふかぬ地攻とせり又浸し攻とせり
城のとりは地と築ふ可くは妻勢
とせり城のとりは下り地と築ふ可く
堀と城と浸しと浸し攻とせり右

女松の敵の人心を落し給ふ事
は松也但し一島しく用はるは遠く味方
の言と流るる事有るは妻勢とせ
り早急な地攻とせり敵の人心と攻ふ
浸攻の後と敵の人心と攻ふ女松の
敵を城のとりは妻防く可くはすまは
立競ふ成く味方利ありは成七友

行入也

十五氏長きく大攻風の唯速大持討氏
之天弘と云く是れ燒劬と云
之傳と云くよふふ陰陽奇正傳と
劬く一々意味を大略く共傳と
合を有利と云傳と云為也大付れ及
志願二三人もく放火と歎ら傳
此の貴度と放火す一々自
傳の劬と云く不之と云一放火と一

者此の傳と云く一々意味を大略く共傳と
合を有利と云傳と云為也大付れ及
志願二三人もく放火と歎ら傳
此の貴度と放火す一々自
傳の劬と云く不之と云一放火と一
風乃唯速と云く乾潤の考或は
人乃乾潤の考と考く放火と
一々意味を大略く共傳と
及云人乃乾潤と云天乃潤と考中
意乃潤と守乃潤也小火と云歎

小痛然之乃天母之在也杯瓜
端ら歎城近之積も火矢とて干
之百し対掛く火攻り海ふして
人数とて攻ら義也又林本在杯
まぐ杯子より水は使ふ火攻と
て月へ一右何まて悪く人ゆけ放
大寸道は歎城へ攻入るるを焼塞
ぐ事と有へ一之考へて行安

平竟良約は何ふと味方と爲
ま使ふはよさより水火やと
主攻の味方人数と換せらる積ふとま
海也と武教^音なり也右水火おれ使
攻と云也

平氏もよくあふして是を夜後ふして
是は勝は大事を傳ふと云くは意は
味方の使充海へ歎へ使はは間を

音、急、城と攻め、一、又、敵の備えは
一、あつた、況、つ、つ、味、方、後、小、一、
一、敵の、況、ま、と、わ、け、面、後、小、是、に、指、下、
と、ま、り、早、急、敵、方、我、方、取、回、四、回、我、方、
と、ま、り、破、る、物、を、皆、敵、か、ま、り、常、任、云、
形、の、敵、は、終、城、一、と、神、心、と、ゆ、え、
一、と、是、と、知、成、と、急、小、一、と、是、と、反、
成、と、後、小、一、と、是、と、勝、つ、位、と、一、

是、中、有、形、の、敵、と、一、并、一、と、勝、つ、
一、敵、は、大、事、お、傳、ま、り、は、長、の、位、也、
一、氏、名、の、ま、り、計、策、攻、と、ま、り、は、是、を、傳、
と、義、兵、か、ま、り、建、武、の、古、楠、正、成、の、
旨、の、別、後、盛、山、の、城、徒、へ、音、相、と、歸、り、
指、一、と、一、と、誠、と、ま、り、計、策、と、為、耐、と、
指、一、と、一、と、云、は、義、と、威、一、と、支、
一、と、誠、と、此、方、の、義、小、後、と、ま、り、

まじりたり之略も弱も用る所まじり
あはれぬい也徳ハ敵を許るべき為徳
古徳扱と兵糧取りとく敵ハ城戸
乃口贈まばそ徳と敵を安んじんとく
怒く実かまば互競小成く味方より利
主より或も敵の中れ知人(善物を送
まそ反次と務るを何そ夜と徳ハ
そ志と城戸中く頼み也頼みかみ

まばそれよほく或は引か(或は味方
帰伏に或は大扱ひ或は味方とて敵
乃城戸中く頼みと生えそは城戸
迷ひ(或は彼を許しとけく義兵と為
廿二東貨海とくもそ我之委細重許
計策と教海とくもそ考合せり
ま(一)米免彼利と争ふ或は忠と
争ふ或は城戸と争ふくは此義

昔よりきくことしむれ侍氏他志を彼が
らんとすべし然とすくち平の世と為願ひ
皆計策の行案とす氏志の侍也

廿二氏志のきく一陣一たびは為奇とすきき
ら張る終日城と攻くこと夜行本氏
射る之を松と抱と抱して融へ申と
別の園と申す行本と射る或る言
兼小陽とすあるしり行本と射る

射ひる苑角度毎には侍と考へ為奇
へし回車を敵しり他く防くあり一
度宛れとす叶はる是是と一陣り
一度宛れは為奇也と氏志の侍也
二回ありは後を又何と西教也と
答へて城と攻め守張る相法にて
川通と或る松子とあり重く攻へ
しり川通と或る松子とあり重く攻へ

作はまの城と致るを六部と致す
味子と損七と致すは城と色なく
車とよしの信也致す致城の終はは卷
解く事と氏長致す致す

一 氏長の言く巻解時ハ一偏切ハ治す
なく是ハ一夜ハ川と事ぬれ
くは意を松子より重く城と致
致すは川と事ぬれハ言ハ及す致す

二 和法にて城と巻解首と致すは若城
主の備く致すと事有ハ言ハ
一夜ハ川と事ぬれハ一偏切ハ治す
なく是ハ一夜ハ川と事ぬれ也

二 氏長の言く保川と用也ハ言く保
川と云々致す同と云ハ言ハ先陣と云
致す後陣ハ及事と考ハ言ハ比治
言ハ押ハ言ハ成ハ言ハ後ハ陣と云ハ

川反へ一不敵回を以て討つ後陣と立
其の先陣より静し戦と相く川反へ
何ヶ夜少くし先陣と後陣と分る
右の川反の張は後れ反をとり
一辰宛りとて教場へ敵と隔る言也
勢を代るく引退く衛振の備也
又相争より居りて列て川反他
をしまし一氏をのり也

三

氏を捨後伏兵と教へり是を築城の
敵が海とも相候はる河川の類い
去りりと思ふ言人よ備へ危一敵よ
己よ備く捨後伏兵と用也一と
捨後伏兵と云々味まれ討つ後伏
兵と重く攻城の勢と相く一夜
川上らるとも敵城より不意よあら
ぬ捨後伏兵も打屋と相也敵

おろり付のあ敬し備へ女也是は若民也
の教也

四 氏長也、討と教へるは是は味すれ解る
可と敵城より不言くもく討事と云
是、討と云は、前方法平へ下り七
川守の同よ中よ南るは守と合す
七、一、夜よ味方と川とるると言ひ
敵不言くおろり付の立懸中くおお取

おろり付は、討と教へるは、是は味すれ解る
依る用るより及んば、是は、
右に、四、條、武功、の、教、小、事、く、ま、は、
交り、一、共、は、言、く、城、と、攻、り、討、り、力、
し、と、云、く、城、と、攻、り、討、り、力、
云、言、は、城、と、越、陰、と、彼、る、事、
前、よ、し、と、云、め、く、城、と、攻、り、と、下、第、
下、心、を、攻、り、と、よ、し、と、云、め、く、子、

城と攻る所の力屈よくなり早免
城と攻る所の計を以て早免れが
味方人数と害い力と屈し一
敵を痛くしむ敵は味方大なる
後とされ敵を自身と認るが
心と痛くしむ敵は一人と攻る
又若くは云ふ設る所より剛
可なり弱用ならざる強か

は四の物と兼く七道は剛
よく二界小云わく柔し設る所
あり為柔は設る剛し是より
友よ水火と便し攻る弱と用
る所よりあり計策と用力強
加ふる所あり俄攻とまは四
物と兼く七道と剛は城を
守る事也一早免風の

便るし水大と回交はり攻也又云
はよ云敵一人と損しと奪人
換せらる是敵と資て我と換せら
東甚ふ也と云く尉繚子云く城
と攻事々容易と思へりすし攻
城は大方云くは練るは云く是
敵と陰と攻は備定り味は大勢也
と云ども八方に分まると小勢と云

はし敵の陰と彼ら云くは是ら
味多多く換せらる是夜よと奪く我を
換せらる事と云る時は是れ敵城と攻
るす其敵一人と損しと奪人と換
はしと云り却て攻城は是れ是ら
下策と成く險と彼ら云くは是れ
乃味方と云換せらるは是れ我と損
せらる事眼前と云くは是れ是れ是

將にあらず友の歌の情と云くは
乃一乃の血ぬ〜〜て信と云わ
く之也是乃城の行要と云皆氏長
の友也

又氏長の云く神人の曲尺大車お傳を

右の傳は皆神人の曲尺と用ひ〜
人の傳は〜好恩人の傳の情が神中

は難礼はる友〜
あり友の神人の曲尺と根を〜
南は〜乃他車乃〜
信く神人の曲尺大車お傳を〜
長者〜乃乃乃城乃格也

共丁回書卷第拾
 寺藏
 同く其後行はるべきや一巻
 其の敷金に云はるるも其のま
 ち敷金に云はるるも其のま
 ち敷金の用は成る事然し其の
 敷金に云はるるも其のま
 ち敷金の用は成る事然し其の

共丁回書卷第拾
 寺藏
 同く其後行はるべきや一巻
 其の敷金に云はるるも其のま
 ち敷金に云はるるも其のま
 ち敷金の用は成る事然し其の



共は同言卷第十

守城

同く之を汝ら何と汝らやと答へて之を
守城と教むべし一氏を以て之を城と云ふ
之を城小築く敵を防ぐは之を城と云ふ
大我の内及城を守る我より之を城と云ふ
之を我より之を城と云ふ我を城と云ふ
叶小町此證を皆味方の人数と成也

そとと云わ止事とゆきて城は巻平死
北小端の事淡とほる友は小勢少事
大勢對す大軍より巻る程少くと
必行しとて和後ほる事ゆるま必城と
枕ふてお死すへしと思ひ定むへし
和後ほる城と歎へ返るは時ハる友
小勢城の事必負よぬ也行ま共歎の
攻法は雨はげ理と忘れと身と悟成

公義の程と利府と眼前に理と立脚
和後しとてぬく死しる例古今よ
多しと思ふは公義也是守城す一乃
友へ但し勢城より前方和後ほる事ハ
独子と信くまは又早死守城ら城
小力と入るべき人比お返して城防
く信と与城の二字と忘るへし守城を
城くこととて去教とちり神ん城主

と成る菟城一六根軍を神人の下
知しほひ動靜をまじりて堅固の大物
は位階一りの城を築く敵と防討に
大軍よあわしめて必滅を逃けずとま
りて家来者一りせり菟城は菟
敵と防討はこと宜ししは是こそ
細よまば城を地とちりて築いた城とち
る所まじり常よせしむるは三城を築く

一
六城と一りて築り我のよ自出とせらる
ち城のむねに位也城を築く攻る討に
復しむるして防くべし敵が攻るを憚おそれ
攻るまぬれし身まじり敵が攻る討に出入
和し天の時と比臨くとあはしむる理けし
討に攻城を下築くする所ち城を利も也
ちるまじり人数一り攻るまじり人数一
負しむる必死は是こそ思ひ定むるは十

死の位中も思ふに交定人の務と長^長也
也及中同一事也之故城の守中守城
と云ふ人この事也是れ守人の教に凡
世中よと智を辨ふて下るる事也教
下るる事也為守城之要也其教は
義之
同くは城之何と云ふ也と云ふ事
是城の守は之を修く教也

一 氏長入る方者八の徳を用と云
は是れ守者城の形八の徳は徳は城
人と成く進退動靜南はるの徳は
と云ふ城と及事者其道理とい
す是れ形と定はれ及守城の徳
し又修之廣う部よ人教と云く徳
はる部よ人教と云く徳はる部よ
五部ふる二徳又一は二部ふる一徳

とて配して城郭に能く教誨し勤
静其に氣後在右へ自由使物し保るる
形乃定は之は其法に形に格計
よりの寸法卒に着恩賢不肖勇
怯怯弱と城郭の繩法とを氣合せ
も分は死と与ふ一相教とを
四方とちて七内より外へ修くは方
南く教罰し外郭の志を深切し其

と防く候はまらわ別す之生教地
道と二分一とを比とするは別也各
陰陽とて身体に繩法の方急曲と
況其に乃理し可く功とをまら別八
代傳也平者すは比陰より之急矣
乃時と修く之形若陰陽と具し八
と成り人あり及して人比し三陽と
此の字す八乃乃傳也様妻細と云

人比の将衛と法止へ一儀小勢中々
城とちり中勢中々所とちり大勢
ふくち國とちり若き王答へ回答は
分限は信く夜帝教称をく教へか
や但し前後は志離別へよ与れ
ハハはよあへすハハハハの字と城
郭へ人教満く巡る是物未れ
あくと定へて安波まの郭へ

内くろ花子とよま若合勢し巡るま
かれは法軍万端と存れ意味あへす
へ

一 先づ法軍人質と取らば城へ若婦人
壯男一不は至来れく老弱れ兵を撰
て為合と能く是と守へまへと
なくけ言ち城内へ送ると信く人質は
ぬる好ことぬて婦人壯男と一所へ

室すは文男女と一不よ金河の女は男
れ死と遊と男の女のおもひよりまき
城内の弱りく女友よ法士の婦人の
人質よなと本城よ藤の法平を以
顧るよあく勇進んともむむ
為也老弱れ共と撰く人質とちり
はるらよ女よ友よる日哉よ六十
下れ老若と身七筋力んを使よ用る意

あり難人よむると人質とわたり
あ根と堅くして城とちり
室平我比お教く法人数比お共
女あふら妻子と思ひ教と顧る夜也
行るよ妻子と質よれと堅固の比
筑く妻と対室バ法人安徳よる也
但法人が疑はるると若人とよ
人質の中小し中年の老若よら

子よりの屏とちて七武をせしむれを
其は先かゝる郭とておきて決槍
と況は七夫石玉茶と持置て人質
下女小ら飯と炊て杯す人へ但離り
三乃郭と破りてまゝる處を別人質と
路を城へ入るへ一石河とて地を
人情れ私とてする方圓八つれ備と
成長れ飯也

一 槍軍奔共敵れ備とては言を帯り
便好くして城内と唯目下とあつ小依り
味方れ弱き方へ合力とる備と槍軍と
是又あきの座と身とく不意に謀
しりお威らぬ軍とよる役人と奔共
と云也又城中の逆んれを討ね飯
と敵れ備と云也張バ二子も雲と雲川
よ今も四方とあつはる所とて